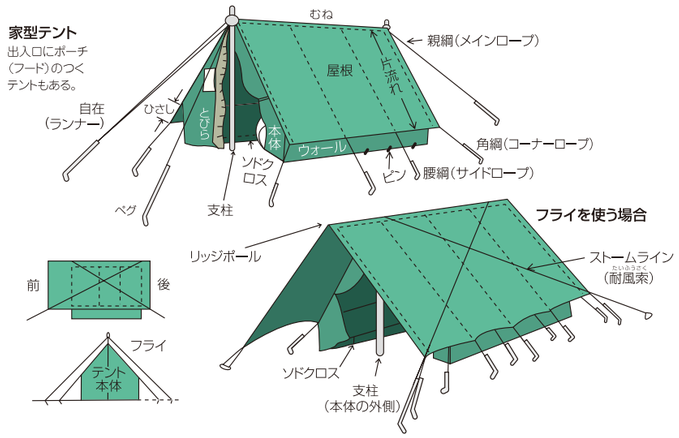
長期キャンプにはコイツだ！ ベーシックな家型テント 超活用術！

最近「ボーイスカウト隊の夏キャンプは5泊以上にチャレンジしてみよう」ってかけ声を聞かないか？

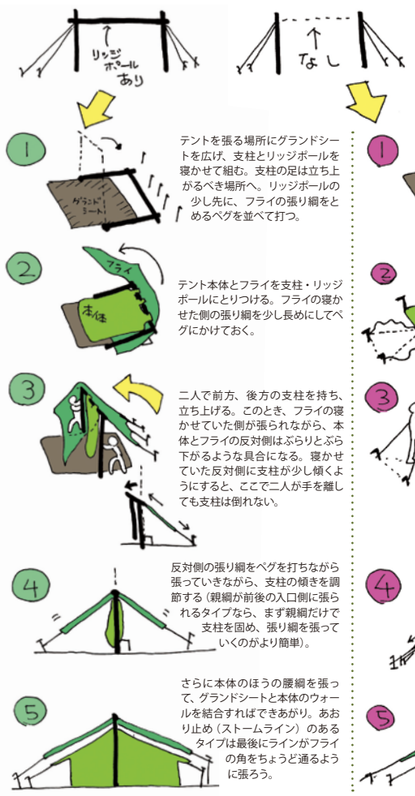
そう。5泊以上くらいの固定キャンプは生活にゆとりができて、そのぶんいろんなプログラムを存分に楽しめちゃうし、隊の仲間と過ごす時間もたっぷりとれて面白いぞってわけ。

キャンプが長くなってくると、やっぱり雨の日もあるだろうし、テントはできるだけ快適な空間にしたいというものだ。ドームテントは軽くて設営も簡単で便利だけど、泊数が増えてくるとちょっときゅうくつな感じもする。そんな時こそ、分厚くて重いが、昔ながらの「家型テント」の出番。長期キャンプにはうってつけのテントなのだ。

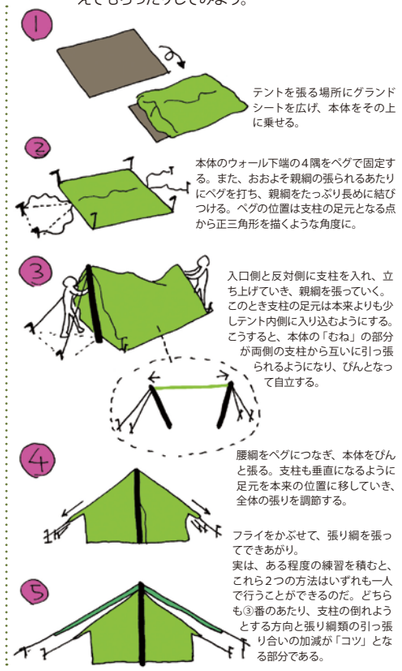


家型テントの2つのタイプ別基本立ち上げ法

家型テントには実に様々なモデルがあるが、大体「むね」の部分にわたる「リッジポール」の有無によって二分される。君の班や隊の装備にあわせて覚えておこう。設営のときには他にも「かまど作り」や「水くみ」などいろんな仕事があるから、二人で張ることができる方法を紹介する。いろんなやり方があるからさらに応用したり、先輩に教えてもらったりしてみよう。



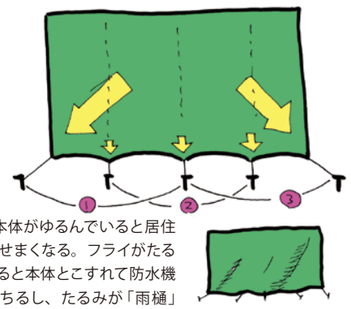
1. テントを張る場所にグランドシートを広げ、支柱とリッジポールを寝かせて組む。支柱の足は立ち上がるべき場所へ。リッジポールの少し先に、フライの張り綱をとめるペグを並べて打つ。
2. テント本体とフライを支柱・リッジポールにとりつける。フライの寝かせた側の張り綱を少し長めにしてペグにかけておく。
3. 二人で前方、後方の支柱を持ち、立ち上げる。このとき、フライの寝かせていた側が張られながら、本体とフライの反対側はぶらりとぶら下がるような具合になる。寝かせていた反対側に支柱が少し傾くようにすると、ここで二人が手を離しても支柱は倒れない。
4. 反対側の張り綱をペグを打ちながら張っていきながら、支柱の傾きを調節する（親綱が前後の入口側に張られるタイプなら、まず親綱だけで支柱を固め、張り綱を張っていくのがより簡単）。
5. さらに本体のほうの腰綱を張って、グランドシートと本体のウォールを結合すればできあがり。あおり止め（ストームライン）のあるタイプは最後にラインがフライの角をちょうど通るように張ろう。



1. テントを張る場所にグランドシートを広げ、本体をその上に乗せる。
2. 本体のウォール下端の4隅をペグで固定する。また、おおよそ親綱の張られるあたりにペグを打ち、親綱をたっぷり長めに結びつける。ペグの位置は支柱の足元となる点から正三角形を描くような角度に。
3. 入口側と反対側に支柱を入れ、立ち上げていき、親綱を張っていく。このとき支柱の足元は本来よりも少しテント内側に入り込むようにする。こうすると、本体の「むね」の部分が両側の支柱から互いに引っ張られるようになり、ぴんとなって自立する。
4. 腰綱をペグにつなぎ、本体をぴんと張る。支柱も垂直になるように足元を本来の位置に移していき、全体の張りを調節する。
5. フライをかぶせて、張り綱を張ってできあがり。

実は、ある程度の練習を積むと、これら2つの方法はいずれも一人で行うことができるのだ。どちらも③番のあたり、支柱の倒れようとする方向と張り綱類の引っ張り合いの加減が「コツ」となる部分である。

ピンと張ることの意味

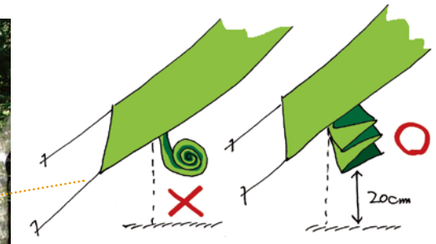


テント本体がゆるんでいると居住空間がせまくなる。フライがたるんでいると本体とこすれて防水機能が落ちるし、たるみが「雨樋」のようになって雨水が幕の一部に集中することで、やはり防水機能が落ちる。

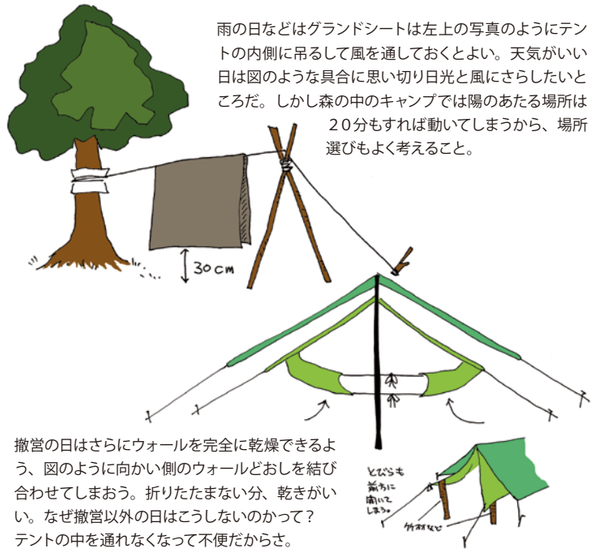
4隅の角綱で引っ張りがちだが、せいぜい布をしっかり張れるのは端から真ん中くらいまで。すべてのペグが素直に働くようにていねいに位置を揃えていけば、ぐいぐい引っ張らなくてもきれいに張れるものだ。

快適ドライでキャンプを乗り切る

家型テントの最大のメリットの一つが乾燥しやすいこと。グランドシートを取り外し、ウォールやとびらを上げてしまえばすべての幕類に風を通すことができる。テントがじめじめしないし、空気がすっかり入れ替わるので快適そのもの。地面にも優しい。明らかに晴天が続きそうな夜はこの状態で地面に直接ロールマットを敷いて寝袋にくるまって寝るのも自然との一体感を感じられて気持ちがいいものだ。



ウォールを上げるときは、ぐるぐる巻かない。巻いてしまうと地面と接する一番湿気をおびたところが内側になってしまうので乾燥の効率が悪いからだ。右のイラストのように「蛇腹」に折って、ゆったりと結んでおこう。地面からは20cmほど浮かせておく。



雨の日などはグランドシートは左上の写真のようにテントの内側に吊るして風を通しておくとよい。天気がいい日は図のような具合に思い切り日光と風にさらしたいところだ。しかし森の中のキャンプでは陽のあたる場所は20分もすれば動いてしまうから、場所選びもよく考えること。

撤営の日はさらにウォールを完全に乾燥できるよう、図のように向かい側のウォールどおしを結び合わせてしまおう。折りたたまない分、乾きがいい。なぜ撤営以外の日はこうしないのかって？テントの中を通れなくなって不便だからさ。

班長のおやすみ前のひと仕事

1日が終わって「さあ、疲れた、寝るぞ」という場面でも、班長にはあとひと仕事残っている。自分たちのテントの状態を確認しておくのはやはり班長の責任なのだ。誰かが足をひっかけて抜けかかっているペグやゆるんでしまっている張り綱がないか、ぐるりと点検しよう。テントの幕や張り綱類も湿気や乾燥でわずかに伸び縮みするので、テンションを見ておこう。

張り綱類はもちろん緩んでいては機能を果たさないし、逆にあまりきつく張られていても綱自身や幕を痛めるし、ペグが引っ張られて抜けそうになるかもしれない。指ではじいて軽くはずむくらい、ぎりぎりたるまないくらい、というくらいのテンションが好ましいのだ。

分厚くて重いけど、雨にも暑さにも強いのだ

きちんと張ることでフライと本体の間に空間ができる。だから強い雨の日にたとえフライの防水が弱ってぐっしょり湿ってしまっても、本体にはほとんど影響がない。

そしてこのタイプのテントってドームテントより中が暗いと感じるだろう？ これは幕が分厚いので日光をしっかり遮ってくれるからなのだ。しかも風が通りやすいからフライの下の温まりかけた空気もすぐ入れ替わるので、涼しくいられるというわけだ。ドームテントのように熱気がこもってむっとするなんて心配がなくて気持ちがいい。

長期キャンプにうってつけの快適な家型テント。大きく重いというデメリットはもちろんあるけど、本体、グランドシートとフライ、ポールとペグ、という具合に分担すれば3人で運んでいくことができる。昔の先輩スカウトたちはキスリングの上に幕類をくくりつけて担いでいったんだそうだ。

一旦苦労して張ってしまえば、キャンプ期間中は実に快適に過ごすことができるこのテント。団や隊の備品で持っているなら、これを君の長期キャンプで活用しない手はないのである。